

越山若水

2021.2.10

—小浜で民俗学者柳田國男が著した「北国紀行」から嶺南を記した文章などが展示され、柳田の描く明治の嶺南像が浮かび上がる—
本紙の嶺南版で、こう報じた記事

に興味を覚えた▼そこで「北国紀行」を読んだ。1909(明治42)年の5月26日から7月8日の日程で信州の塩尻をたち木曾、飛騨を経て北陸、山陰などを旅した。当時は農政官僚で公務の出張だった。福井入りし、こう記している▼「此縣は木ノ芽椽ノ木の連嶺を境として、南北の地形面白きまでに相反せり。(中略)人情も相通ぜざる點少なからず」。福井県の特徴をすばやく的確に捉えている。福井城跡の試農場の見学は雨で中止。その後は汽車で南下して丹南一円を効率よく見て回っている▼小浜での企画展示では、名田庄で女性の仕事着の袴を「カルサン」と呼ぶことに注目する。「日本の地圖の上に、この山袴類の行はるゝ區域を、染めてみたらきつと面白からうと思ふ」と記すほどで「山形地方にてマタシヤレといふが如し」と呼び名の違いも披露している。好奇心を大変くすべられたようだ▼小村の風物や人々の生活から民俗の心をくみ上げ「旅行道」を提唱した柳田。旅の面白みとは、旅の道中で数年前に旅した土地が遠く離れながら似ていると気付く。そんな旅を重ねて複雑に濃厚な味になることと説く。『嶺南紀行』に片鱗がのぞく。